

Special Support Education Research Center

SSERC 通信

(第5号 - 2007年6月)

国立大学法人 筑波大学
 特別支援教育研究センター
 センター長：前川 久男
 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
 TEL & FAX：03-3942-6923
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/sserc/>
 mail：sserc@human.tsukuba.ac.jp

巻頭言

「特別支援教育のスタート」

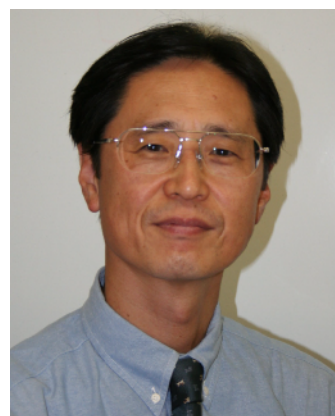
藤原 義博

ご存じのように、いよいよこの4月から特別支援教育が新しい制度としてスタートしました。戦後の障害児教育に関わる制度改革としては、これまでにない大きな変革となります。これまでの改革では、既に教育現場の実態として実施されていたことを制度化することがほとんどでしたが、今回の改革の大きな特徴は、時代を先取りした事業を展開しつつ実態を創設しながら制度化を進めたことにあると思います。したがって、この制度による新たな試みのほとんどは既に実施されていると思いますが、改めて今回の制度改革の要点を押さえておきましょう。

1つは、障害種別ごとに設置された盲・聾・養護学校を、障害種を超えて特別支援学校として弾力的に設置できるようになったことです。2つめは、同じく盲・聾・養護学校ごとに設けられていた免許状が特別支援学校教諭免許状に1本化されたことです。3つめは、

小・中学校等における特別支援教育を推進し、学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能自閉症等の軽度発達障害（今後は、単に「発達障害」と表記されます）を含む、障害のある児童生徒の教育の一層の充実が図られることです。

特別支援教育研究センターでは、この特殊教育から特別支援教育への転換が、障害児教育のみならず、これからの教育全体の在り方を見直す契機となる改革になるように、本学障害科学系と附属特別支援学校と連携しながら、本年度も現職教員の専門性向上のための研修やセミナー、研究助成事業、国際協力等、充実したさまざまな事業を計画しております。また、これまでの実績を生かして、特別支援教育に資する高度な専門性と実践力を持った教員の養成を意図した新たな特別支援教育専攻の改組を予定しております。どうぞご期待ください。



主催セミナーの開催（シリーズ：特別支援教育の最前線）

第6回「特別支援教育における連携・移行にかかわる特別支援学校の役割」

平成19年3月26日（月）に附属小学校講堂において開催された今回のセミナーは、全国から約180名の参加者がありました。また、本センターのe-ラーニング事業の一環として沖縄県立八重山養護学校にも同時に配信されました。

前半は「情報とユニバーサルデザイン」と題して、毎日新聞社会部の野沢和弘氏の基調講演をいただきました。みんながわかる新聞「ステージ」の制作体験を通し、知的障害がある人も含めた全ての人のためにわかりやすい情報発信について、多くの示唆に富んだ内容でした。

後半は「学校間あるいは関係機関との連携・移行について」というテーマでシンポジウムを行いました。附属聾学校からは「聴覚障害児乳幼児教育相談室の移行支援」、附属大塚養護学校からは「保育機関との連携による支援 - 併行通園幼児の事例から - 」、附属盲学校からは「移行支援と連携 - 地域の小学校への就学・在籍をめぐる - 」、附属久里浜養護学校からは「特別支援学校の連携・移行について - A君の事例を通して - 」、附属桐が丘養護学校からは「通常学校等に在籍する児童生徒への支援における養護学校間の連携」と題して話題が提供されました。文教学院大学人間学部の綿祐二

氏から、福祉の立場からの貴重なコメントをいただき、熱心なディスカッションが行われました。

特別支援教育では、障害のある人の乳幼児期から成人期に至るまでの、総合的な支援の重要性が指摘されています。今回のセミナーでは、総合的な支援のために、学校間及び機関間の連携・移行と関係者間の情報の共有が大切であることが確認されました。



「筑波大学特別支援教育研究 第二巻 実践と研究」

本センターでは、特別支援教育に寄与することを目的として、附属特別支援5校が有する実践研究の成果、学校間の連携・協働による実践などを掲載した「筑波大学特別支援教育研究 第一巻」(平成18年10月発行)に続き、今夏には第二巻を刊行する予定です。

特別支援教育に関する研究論文、論文の翻訳、附属学校間連携研究・センター助成研究、および海外の情報など、多岐にわたる内容を予定していますので、どうぞご期待ください。

第3期現職教員研修の開講式が行われました

4月16日、附属学校教育局において、谷川彰英教育局教育長をはじめとした来賓の方々の列席をいただき、特別支援教育研究センターの現職教員研修開講式を開催しました。特別支援教育の担い手として、各都道府県等で活躍する現職教員を対象に17年度から開始した現職教員研修も3年目を迎え、各方面から高い評価を得てきていますが、今年度は、8名の研修生を迎えました。

東京地区の附属特別支援学校5校を実践研修のフィールドとし、特別支援教育研究センターにおける社会的要請に即応した講義・演習を組み合わせたプログラムを活用した研修がすすめられます。



センター事業の紹介【現職教員研修】

現職教員研修事業は、特別支援教育体制の推進のために本センターの中核的事業として平成17年度より発足しました。指導法において専門性の高い教員及び特別支援教育コーディネーター養成のため、一定の教育経験を持つ教員等を対象に、附属視覚特別支援学校、附属聴覚特別支援学校、附属大塚特別支援学校、附属桐が丘特別支援学校及び附属久里浜特別支援学校とセンターでの講義・演習と大学での講義聴講を組み合わせた長期研修プログラムを提供し、特別支援学校及び特別支援学級等教員の専門的実践力の更なる向上に貢献します。

研修の対象者は、特別支援学校、幼稚園・小学校・中学校・高等学校、教育委員会及び特殊教育センター等において特別支援教育に関する一定の教育経験を持ち、障害のある幼児児童生徒の教育を担当する教職員で任命権者(都道府県教育委員会等)の推薦を得た者です。

研修生は、以下のいずれかのコースを選択し、本学の施設・設備を利用し、指導教官の指導のもとに研修を行います。また、免許法認定公開講座に参加することで、特別支援学校教諭の一種・二種免許状の取得に必要な単位を取得することもできます。

(1) 指導法研修重視型コース

附属障害教育5校での指導法に関する講義・実習、指導法及び授業計画等に関する研修
センターでの講義・演習、心理・教育的アセスメントや指導法、教育相談等に関する研修

センター主催セミナー、附属学校共催研修会等への参加

(2) 特別支援教育コーディネーター養成型コース

附属障害教育5校での授業観察、支援部や教育相談部における相談、地域支援実習、及びケースカンファレンス等に関する研修

センターでの講義・演習、心理・教育的アセスメントや指導法及び教育相談等に関する研修

センター主催セミナー、附属学校共催研修会等への参加

第1回の5部門会議が開かれました

5部門会議は、センタースタッフと附属特別支援学校5校の教員（下表参照）で構成され、当センターの事業を推進するものです。5月18日に、今年度初めての5部門会議が開催され、各校から2～3名の先生方が参加されました。各校の教員が実際に顔を合わせて情報を交換し共有するということとは、当センターの最も重要な役割だと思えます。

平成19年度 センタースタッフ

平成19年度 5部門会議構成員名簿

センター長・教授	前川 久男
教授	安藤 隆男
教授	藤原 義博
教諭（視覚特別支援学校）	星 祐子
教諭（聴覚特別支援学校）	庄司 和史
教諭（大塚特別支援学校）	瀬戸口 裕二
教諭（桐が丘特別支援学校）	松原 豊
教諭（久里浜特別支援学校）	畠山 和也
事務官（附属学校教育局）	高瀬 賢二郎

附属視覚特別支援学校	浅野 慎子 原田 早苗 雷坂 浩之
附属聴覚特別支援学校	大竹 一成 松本 未男 両角 五十夫
附属大塚特別支援学校	安部 博志 安川 直史 高橋 幸子
附属桐が丘特別支援学校	城戸 宏則 田丸 秋穂
附属久里浜特別支援学校	尾之上 直美 石川 環

助成研究募集のお知らせ

当センターは、附属学校の先生方を対象とした研究助成を行っています。詳細は、当センターホームページをご参照下さい（下表は、昨年度実績です）。

<http://www.human.tsukuba.ac.jp/sserc/page024.html>

- ・ 一件につき上限で10万円までの研究費を助成します。
- ・ 採用件数は約5件の予定です。

平成18年度助成研究採用テーマ

学 校 名	研 究 テ ー マ
附属久里浜養護学校	自閉症児の社会性・適応性に関する教材・支援ツールの開発・共有化に関する研究
附属盲学校	視覚に障害のある児童が在籍する通常学校等におけるサポートの在り方について
附属大塚養護学校	特別支援教育体制下における小学校内外の連携の促進要因に関する調査研究 地域支援体制の評価の視点

【 現職教員研修 研修生日記 】

何か新しいことが始まると、ノートを更新することはありますか？私は、まさにその一人です。新年度が始まるから記録用に購入、新しい研修に年間通して参加するから、「さあこれに記録して自分の財産にするぞ」とはりきってまた購入。でも、最初の意図は完結せずノートの存在すら忘れ、年度末に職員室の机の中を整理すると、2～3ページだけ使ったノートが何冊も出てくるというのが私の実態です。

コーディネーター養成研修への参加が決まり、もちろん新しいノートを新規購入。ちょっと今までと違うのは、4ページ目を過ぎたこと、毎日そのノートに目を通して（なんて書いてあるのかなあ...と自分自身でも分からない字も時々ありますが。）それと、今までの学校生活では聞いたことのない講師の先生から度々出てくる英単語、（研修生の中で、知らないのは自分だけかなあと恥ずかしさを感じつつ）後で、聞くか調べてみようと思いつき最終ページにこっそりメモするなんて、今までしたことない工夫（！？）もしたりしています。

私の場合、研修は半年で終了します。半年後に、このノートが何冊にも増え、真の財産となるよう、毎日を大切に過ごしていきたいと思っています。

（静岡県立沼津盲学校 高田 宗享）

筑波大学特別支援教育研究センターで、現職教員研修生として半年間の研修がスタートしました。

4月、東京にやって来た時には、とにかく人の多さやスピード感にすっかり圧倒され、自分の存在感が、まるで大都会にポロッと落ちた米粒か小さな種ぐらいにしか感じられませんでした。人から見れば些細なことかもしれませんが、東京での生活は、様々なことに驚き、感動し、毎日が貴重な体験です。おそらく研修生としての一步を踏み出していなければ、このような貴重な経験や感動はなかったし、毎日を平凡に過ごしていたに違いありません。日々の研修については、これまでの自分の不勉強さをひしひしと感じています。しかし、研修を通して、先生方の子どもに対する思い、深い物事の見方や考え方に触れる度に「この研修に来て良かった。」と心から思うのです。

この研修を通して、特別支援教育の中で、私は、子どもたちとどう向き合っていこうか、私にできることはどんなことか、じっくり考えていこうと思います。そして、これから多くのことを吸収し、半年後には、しっかり芽を出していきたいです。

（広島県立広島特別支援学校 下山 真弓）

巻末言

大塚キャンパスの中庭にカルガモの親子が住んでいて、キャンパスのアイドル的存在になっています。食べ物とお水のお皿、水浴び用のたらいも用意されています。今後、すくすくと育っていく子どもたちが楽しみです。

日々、カルガモたちに癒されながらセンター兼務となり、初めての仕事として取りかかったのが、このSSERC通信第5号でした。原稿依頼を快く引き受けていただいた皆様のおかげで、予定通りの期日に発行することができました。この場をお借りして感謝申し上げます。平成19年度、他の仕事もこの調子で進んでいくと良いなあと思っています。今後とも、よろしくお願いいたします。（畠山）



* この通信は、理想科学工業(株)のRISO-ORPHISで印刷しました。